

はじめに (advanced IBD fellowship とは)

Advanced inflammatory bowel disease (IBD) fellowship とは、米国 IBD 専門医育成プログラムである。米国のスタンダードな消化器 (GI) 内科研修では、まず、内科レジデントとして3年間のトレーニングを行ったのち、内科専門医を取得する。その後、3年間の GI フェローシップを通じて、消化器内科医になるためのトレーニングを行い、消化器内科専門医を取得する。研修として必須ではないが、GI フェローシップ修了後、IBD、肝移植、栄養、内視鏡などに特化した超専門研修 (Advanced GI fellowship) を1-2年行うこともできる。米国の GI フェローシップは、ACGME (米国卒後医学教育認定評議会) が管轄しており、基本的には、米国内科専門医を取得していなければ、入り込むことはできない。また、米国では、消化器内科は超人気分野であり、激しい競争に勝たなくてはならない。一方、Advanced GI fellowship は、必ずしも ACGME 管轄ではないこともあり、GI フェローシップと比較すると、国外からであっても、比較的入り込みやすい。シカゴ大学 Advanced IBD fellowship では、米国外で内科、消化器内科研修を修了し、ECFMG certificate を取得した消化器内科医でもアプライ可能であり、これまでに、カナダ、オーストラリア、イスラエル、日本からの医師を受け入れた実績がある。筆者も、さまざまな縁に恵まれて、2019年7月より、シカゴ大学 IBD フェローとして2年間の米国 IBD 専門研修を経験することができた。

このような貴重な経験を、日本語にして、若手消化器内科医向けの教科書にできないかと、当時私のボスであった Prof. David T. Rubin に相談したところ、「とても良いアイデアだ。Shintaro が日本人としてシカゴ大学で経験したことを日本語にして IBD の教科書にできたら、とても有意義なものになるよ！」とご理解いただき、シカゴ大学の症例を紹介することも快諾いただけた。しかし、米国のプラクティスをそのまま日本語に翻訳して教科書をつくっても、日本の IBD 診療では使い物にならない。そこで、

私のもう一人の恩師である東邦大学医療センター佐倉病院消化器内科の松岡克善教授にご相談させていただき、日本のIBD専門医の視点から監修いただけることとなった。

本書には、以下のような、類書にはない2つの特徴がある。

1. まず、筆者がシカゴ大学IBDフェローとして経験した症例に基づくシナリオを、日本の消化器内科医の視点で紹介していることである。本書の内容が、日本のIBD診療でも使えるように、フローチャートや表などは全て日本語で作成し、あくまで日本の先生に読んでいただくことを意識して、記載している。例えば、生物学的製剤のTherapeutic drug monitoring (TDM) に関しては、日本では、ルーチンではないが、米国では、IBD診療のスタンダードである。そのような日米の違いを踏まえた上で、トピックスや紹介論文を厳選し、米国と日本の両方でIBD診療を経験した筆者による独自の構成となっている。
2. また、日米にかかわらず、しばしば遭遇するIBD症例に厳選することで、IBD初学者向けの内容としたことも特徴である。本書では、指導医とのディスカッションや症例プレゼンテーションなどを通じて、実際に、しばしば問題となったトピックスをManagement pointsとして提示し、それに関する重要文献を端的に紹介している。若手消化器内科医はとても忙しく、勉強する時間が限られていると想定される。従って、遭遇した患者と類似した症例を本書症例編よりピックアップして読むことで、基本事項からアップデートされた情報までを、短時間で、効率的に学習できる構成となっている。また、日本では、今後、IBD専門医制度が導入される見込みであり、IBDのいろはを端的に紹介した本書は、専門医試験の対策本としても活用できるのではないかと考えている。

本書の作成にあたり、シカゴ大学の症例使用のご了承をいただいたシカゴ大学 Prof. David T. Rubin, お忙しい業務の中、日本のIBD診療の視点でご監修をいただいた東邦大学医療センター佐倉病院の松岡克善教授、シカゴでの留学生生活を支えてくれた妻と息子に心より深く感謝申し上げます。また、本書作成に関して、内容の査読、編集から出版までのサポートをいただいた筑波大学出版会の先生方、スタッフの皆様にも厚く御礼を申し上げます。

2022年6月
秋山 慎太郎



シカゴ大学病院



Prof. David T. Rubin との写真



同期IBDフェローとの写真

Commentary

Dr. Shintaro Akiyama was an advanced fellow in inflammatory bowel disease (IBD) at the University of Chicago for 2 years. At the University of Chicago, we have one of the largest IBD programs in the world, with over 800 patients seen per month. The training with us includes management of complex IBD and involvement in numerous clinical and translational research efforts. During his time with us, Dr. Akiyama was an exceptional trainee, contributing to the care of many patients and interacting with the many members of our multi-disciplinary team. His original scholarship and investigation into the outcomes of patients with ileal pouch anal anastomoses (J pouches) has established a new nomenclature for our field, and will better define the outcomes of these patients for future studies of etiopathogenesis, treatment, and prevention of IBD.

I am so grateful to him for his hard work, and impressed that he has wanted to translate his education to his wonderful colleagues in Japan. It is rewarding to see the final product, and to know that we have such good friends in the field of IBD with whom to share efforts and collaborate. I know that the readers of this book will find its contents and Dr. Akiyama's efforts to be very helpful in the care of patients, but also hope that it results in many future outstanding physicians and scientists who dedicate their careers to helping those who live with IBD.

DAVID T. RUBIN, MD, AGAF, FACG, FASGE, FACP, FRCP (Edin)

Joseph B. Kisner Professor of Medicine

Professor of Pathology

University of Chicago